

## 平成26年度 徳島県立ひのみね支援学校 学校評価総括評価表

徳島県教育基本目標	『とくしまの教育力を結集し、未来を創造する、たくましい人づくり』～県民とともに考え、ともに育むオンリーワン教育の実現～	
学校経営基本方針	「三つの保障」「二つの指導」「一つの約束」 三つの約束：「学習の保障」、「安全の保障」、「人権の保障」 二つの指導：「人間性」と「専門性」の融合、「規律と礼節」 一つの約束：「地域や保護者に開かれた学校」	
本校の教育目標	「徳島県教育振興計画」に基づき、児童生徒一人一人の個性と人権を尊重し、社会参加と自立の促進に向けて、自己実現に努める心豊かな人間を育成する。	
本年度の重点目標	社会参加と自立の促進に向けて、3つの「I」を三位一体で推進する。 1 ICF（国際生活機能分類）の理念に基づく障がい児の理解と啓発の推進 一人一人の児童生徒の実態を把握し、具体的な指導内容を設定する。そして、キャリア教育プログラムの推進を図る。 2 ICT（情報通信技術）の推進による外部の専門家を活用した授業改善 授業の中でICTを効果的に活用し、指導方法の改善を図りながら、児童生徒の学力向上につなげていく。 3 ISO（新学校版環境ISO）の推進を通じたESD（持続可能な開発のための教育）への取組 ESD（Education for Sustainable Development）に取り組む中で、他者・社会・自然環境とつながり、かかわる力を育成する。	
	平成26年度末総合評価	次年度への課題
	① ICFの理念に基づく、児童生徒の実態把握については、実態把握表の様式の改訂を実施し、年度末までに児童生徒一人一人の実態把握表へ記入する段階となった。キャリア教育に関する取組は、キャリア教育支援プログラムを作成し、各教科等の年間指導計画との関連についての再検討を始めるまでに至った。また、資格取得にチャレンジするなどの効果的な実践につながった。 ② ICT機器を授業で使用している割合が、95.9%であり、それにともない9割近くが授業改善を図ることができている。 ③ ISOの推進については、新学校版環境ISO推進委員会を学期に1回実施し、計画や活動内容について確認・協議することができた。また、ESDのアプローチの一つとして、ペットボトルのキャップ集めで毎月3Kg以上を回収したり、学校周辺のゴミ拾いの活動を児童生徒・保護者・教職員が協力して実施することができ、社会の課題と身近な暮らしを結びつけ、新たな価値観や行動を生み出す学習や活動を実現できた。	① LIFEの活用については、検討中である。また、実態把握表についても活用しながら、より効果的・効率的な実態把握表となるよう検討することが必要である。中心的課題の位置づけについては、校内の理解が十分得られていないため、モデルケースの取組から発展させる方針である。キャリア教育支援プログラムについては見直しを実施できたため、次年度の活用状況を把握しながら改善を推進する。 ② ICTやICT機器についての理解をさらに深め、授業への積極的な活用をさらに図らなければならない。研修方法の一つとしてWeb上でのeラーニングの効果的な活用等を検討する。また、外部の専門家と連携し、身体の動きに困難のある児童生徒の能動的な活動を支援するためのICT機器の活用プログラムを推進する。 ③ ISOの推進については、重度の児童生徒の学習として導入していく機会を増やし、さらに学校全体で取り組んでいけるようにする。また、より多くの人に呼びかける機会を作り、保護者同士や地域との関わりを広げられるようにしていく必要性がある。

重点目標1 ICF（国際生活機能分類）の理念に基づく障がい児の理解と啓発の推進						
自己評価				学校関係者評価	次年度への課題	
重点課題	重点目標	活動計画と評価指標	評価	学校関係者の意見	今後の改善方策	
<p>【自立活動部、支援・研究開発部】</p> <p>○自立活動の指導の充実を図る。(実態把握や自立活動の目標や内容の妥当性が不十分である。)</p>	<p>○一人一人の実態把握や中心的課題の設定を基盤にして、自立活動における一貫性のある指導内容を整える。</p>	<p>&lt;活動計画&gt;</p> <p>①-1 今ある実態把握の表を見直し、検査や観察、専門家によるアセスメント等、実態把握に関する全ての情報を記入できる実態把握表に替える。</p> <p>①-2 全児童生徒について、実態把握表を作成する。</p> <p>②-1 中心的課題のケース会の手順を検討する。</p> <p>②-2 校内で抽出した事例について、中心的課題のケース会を行う。</p> <p>②-3 中心的課題と各教科等の年間目標・学期目標・指導内容との関連について検討する。</p> <p>&lt;評価指標&gt;</p> <p>①実態把握表について、80%以上の教員が目標設定に活用できると回答する。</p> <p>②中心的課題のケース会の実施報告について、80%以上の教員が自立活動の目標設定や指導内容の選定に活用できると回答する。</p>	<p>&lt;活動計画の実施状況&gt;</p> <p>①-1 自立活動に関する実態把握や課題、目標設定の際に活用しやすくするために、自立活動の6区分に分けて整理できる実態把握表の様式を作成した。</p> <p>①-2 全児童生徒の実態把握表の記入は、学級・ホームルーム担任を中心に組み組んだ。</p> <p>②-1 ワーキンググループを設け、中心的課題を導き出すケース会の手順を検討した。</p> <p>②-2 小学部の2名の児童について、将来像、中心的課題を導き出すケース会を試行した。</p> <p>②-3 キャリア教育支援プログラムを活用し、年間目標、学期目標、指導内容との関連を検討する取組を始めたが、まだ明確にできていない。</p> <p>&lt;評価指標の達成度&gt;</p> <p>①教員アンケートで、「実態把握表が今後児童生徒の目標設定に活用できると思いますか」という質問に対して「とてもそう思う」7名(15.9%)、「そう思う」33名(75.0%)合計90.1%であった。</p> <p>②教員アンケートで、「中心的課題のケース会は児童生徒の目標設定や指導内容の選定に活用できると思いますか」という質問に対して「とてもそう思う」6名(13.6%)、「そう思う」28名(63.6%)合計77.2%であった。</p>	<p>総合評価</p> <p>&lt;評定&gt;</p> <p style="text-align: center;">B</p> <p>-----</p> <p>&lt;所見&gt;</p> <p>今年度は、実態把握表の様式を決め、年度末に児童生徒一人一人実態把握表を作成することができた。今後どのように活用していくかが課題である。また、記入に際しての研修も検討する必要がある。</p> <p>児童生徒の実態把握を基盤に「将来像」「中心的課題」を設定することで、児童生徒のめざす方向を明らかにし、年間目標や学期目標まで指導がつながることを仮説としたが、中心的課題の位置づけについて、校内の理解が十分得られていない。指導の方向性の全体像から、実際の日々の指導内容までのつながりが理解できるモデルケースに取り組みかけているが、もう少し時間を要する。</p>	<p>児童生徒がそれぞれの障がいの状態や発達段階に応じて、主体的に自己の力を可能な限り発揮しよりよく生きるために、自立活動における一貫性のある指導内容を整えることをめざし努力している。</p> <p>今年度は、モデルケースにおいて、実態把握を基盤にしての「将来像」「中心的課題」を設定する取組、キャリア教育支援プログラム表や実態把握表等の改訂を実施できている。</p> <p>今後さらにケース会や共通理解などの課題解決に向けて努力してほしい。</p>	<p>今年度末に改訂した、キャリア教育支援プログラム表、実態把握表等を活用し、児童生徒一人一人の自立と社会参加を見据えた中心的課題の位置づけ、個別の指導計画へのつながりを明確にし、教員が指導の方針や方向性を共通理解しやすくする必要がある。</p> <p>これまでも個別の指導計画作成のためのケース会は実施していたが、児童生徒の実態把握や中心的課題をの共通理解するためのケース会の設定を行う。</p>

<p><b>【教育推進部】</b> ○国語や算数・数学の基礎・基本が、教育課程Ⅰ類型の児童生徒に定着しにくい。</p>	<p><b>【小学部】</b> ○読みや計算等、日常生活に関連する課題に意欲をもって取り組ませ、学んだことを生活の中で使えるようにする。</p> <p><b>【中学部】</b> ○学習したことが生活に役立つことを理解し、職業的自立に向けて基盤となる能力や態度を身に付けさせる。</p> <p><b>【高等部】</b> ○職業的自立に向け、生活に直結した知識を習得し、実生活で活用させる。</p>	<p>&lt;活動計画&gt; <b>【小学部】</b> ① 桐ヶ丘特別支援学校の指導内容系統図や WISC-III 等を参考に用いて、認知特性や習熟度等について実態把握を行う。 ② 実態把握に関するケース会を1回実施する。</p> <p><b>【小学部】</b> ① 単語や助詞カードを組み替えて文を作ったり、助詞の選び方を考える指導を行う。 ② 時刻・時間の指導ではスモールステップで目標を示し、自信を持って取り組めるように指導する。</p> <p><b>【中学部】</b> ① 国語では振り返りシートを作成し、毎時間学習の振り返りを行う。 ② 計算機を用いた指導を継続的に取り組み、買い物学習を年5回以上実施する。</p> <p><b>【高等部】</b> ① 複数の教員と面接練習を行い、あらたまった場での言葉遣いに慣れるようにする。事前にチェックリストを作成し、自己評価や他者評価の機会を作る。 ② 言葉遣いや金銭の指導では、学校で学んだことを</p>	<p>&lt;活動計画の実施状況&gt; <b>【小学部】</b> ① 関係する教員に指導内容系統図を配付し、対象児全員の検査結果を読み取った。 ② 対象児毎に、ケース会を1回実施し、特別支援教育巡回相談員や特別支援教育コーディネーターから専門的なアドバイスを聞いた。</p> <p><b>【小学部】</b> ① カードを組み合わせ文を作る、助詞を選び空欄に入れる、文中の間違いを探す指導を実施した。1日1回以上、指導場面を設定した。 ② 実態に応じた目標を毎時間示した。自信を持って取り組めるために、○時○分の読み取りを支援するための時計盤を作成したり、つまりいた時にヒントを出したりすることで、自分で気づくような工夫を行った。</p> <p><b>【中学部】</b> ① 毎時間、学習目標の設定を行い、自己評価を行った。 ② 計算機を用いた買い物学習を5回実施した。</p> <p><b>【高等部】</b> ① 2学期に国語担当者が敬語の授業の中で、2回面接練習を行った。他、ホームルーム担任がとくしま特別支援学校技能検定(接客)に向けて敬語を含む言葉遣いの学習を繰り返し実施した。 ② 買い物や飲食、バス利用の機会を7回設けて、購入代金や</p>	<p>総合評価</p> <p>&lt;評定&gt; A</p> <p>-----</p> <p>&lt;所見&gt; 具体的に児童生徒の目標を設定することで、生活の中で活用できる国語や算数・数学の力を養うことができた。また、実態把握に関するケース会に専門的な知識を有する教員が加わったり、複数の教員で検討できたりしたことで、実態が明らかになり、新たな支援方法が得られる等の成果が見られた。</p>	<p>「自立活動」の内容である6区分26項目の中から、指導目標を達成するために必要な項目を選定、関連させながら学習を進め、また、自立活動及び国語、算数・数学の指導内容を関連させながら指導を工夫している。</p> <p>さらに、学んだことを生活の中で生かす内容を、一人一人の児童生徒について具体的に設定して取り組み、個々に応じた手だてで指導を行った結果、成果が見られている。実態把握アンケートにおいても、100%の肯定的な評価を得ている。今後も引き続き、生活の中で活用できるように学力を育てると同時に、Ⅰ類型の児童生徒の課題を再検討しながら自己有用感を育てる取組を実施してほしい。</p>	<p>今年度は具体的に目標を定めて取り組んだが、今後は、国語や算数・数学の基礎・基本に基づく年間を通じた指導を充実させていく必要がある。そのためには、年間指導計画を充実させることが課題である。また、国語や算数・数学で身に付けた基礎学力を、生活や他の教科の中で活用していくことためには、他の教科担当者や保護者との連携が大切となる。校内におけるケース会や保護者との細やかな情報交換を充実させていきたい。</p>
---	---	--	--	--	---	---

校外で実際に使う機会を設定する。

<評価指標>

【全学部】

- ・教員アンケートより実態把握が深まったという回答を80%以上得る。

【小学部】

- ①絵カードや単語カードを参考にしながら、自分で三語文を作り、発表する。
- ②時間割表での時刻の読み取りや時計の読み取りテストの正答率を80%以上にする。
- ③時計を見ながら時間内に活動できることを80%以上にする。

【中学部】

- ①漢字検定8級の漢字の聞き取り問題の正答率を60%以上にする。
- ②買い物学習等で計算機を携帯し、買い物の総額や税込み計算の正答率を80%以上にする。

【高等部】

- ①敬語の使い方を習得し、「達成度テスト」で正答率を90%以上にする。
- ②面接練習で適切な言葉遣いをすることができる。
- ③消費税や割引の計算の正答率を計算機を使って90%以上にする。

- ④修学旅行や校外学習の会

利用料金の消費税や割引の計算をし、帰校後はレシートで確認した。併せて、計算式を忘れた時に使用できるカードを作成した。

<評価指標の達成度>

【全学部】

- ・「ケース会の実施により実態について新たな気づきがあり、実態把握が深まったか」という問いに対して「とてもそう思う」50%、「そう思う」50%、合計100%の回答を得た。

【小学部】

- ①経験したことを思い出し、カードなしで三語文以上の文を作り発表することが100%できた。
- ②〇時〇分の読み取りはデジタル表示では95%以上、アナログ表示では90%以上の正答率であった。
- ③時計を見る習慣がついた。2学期後半からは80%できるようになった。

【中学部】

- ①聞き取り問題の正答率が70%となった。
- ②買い物時に計算機で合計金額を計算し、税込み金額をほぼ100%表示することができた。

【高等部】

- ①「達成度テスト」で正答率が80%であった。
- ②丁寧な言葉遣いで話すことができたが、尊敬語や謙譲語の使い方については間違っていた。
- ③計算機を使って100%正確にできるようになった。計算式カードを利用して計算することもできた。
- ④修学旅行のおこづかいや旅費

		<p>計簿を自分で記入し、金銭管理をする。</p> <p>⑤郵便局や銀行などの公共施設の利用の仕方を知り、自分で出金、入金、振り込みができる。</p>	<p>算の会計や校外学習の費用を会計簿に記入し、収支を計算機を使って正確に確認した。</p> <p>⑤郵便局や銀行、また、コンビニエンスストアに実際に行ってATMや窓口で出金、入金、振込等が一人でできるようになった。</p>			
<p>【中学部】</p> <p>○個別の指導計画の目標等が不十分である。</p>	<p>○個別の指導計画の目標が明確・具体的に、客観的に評定させる。</p>	<p>&lt;活動計画&gt;</p> <p>①平成24年度作成の本校の個別の指導計画チェックシートに書き方例等を加える。</p> <p>②ケース会での協議・共通理解内容を示したマニュアルを作成する。</p> <p>&lt;評価指標&gt;</p> <p>・中学部教員アンケートで、ケース会が充実し、明確・具体的な目標を立てることで、客観的な評価ができるようになったという回答を80%以上得る。</p>	<p>&lt;活動計画の実施状況&gt;</p> <p>①平成24年度版を改善した。書き方例を充実させるより、作成メリット、本校の個別の指導計画について、Q &amp; Aを設定することが有効であると考え、「個別の指導計画作成にあたって」を作成した。</p> <p>②ケース会の目的、ケース会までの流れを周知した。目的の立て方の話し合いに時間を要さないように、ケース会までに確認・検討しておくことで、ケース会において目標等の妥当性の検討を行うことができ、客観的な評価につながった。</p> <p>&lt;評価指標の達成度&gt;</p> <p>中学部教員アンケート結果で客観的な評価ができたという評価が84%であった。</p>	<p>総合評価</p>	<p>Q &amp; A「個別の指導計画作成にあたって」を作成やケース会の流れの改善など工夫できている。一人一人の生きる力の育成のためには、具体的な目標設定と評価が必要であるので、さらに客観的な評価ができるように検討を進めたい。</p>	<p>保護者に日々の教育活動内容を伝えることができるよう、目標についての子どもの変容をわかりやすく伝えることと共通理解を図り、個別の指導計画の充実・活用を進めていく。</p>
				<p>&lt;評定&gt;</p> <p>A</p> <p>-----</p> <p>&lt;所見&gt;</p> <p>昨年度までは、ケース会で目標の立て方や内容が適切かどうか等に時間を要することがあったので、事前に目標の内容について確認・検討しておく流れに変更した。今年度は、ケース会において、年間目標達成にむけての学期目標の妥当性の検討、取組について共通理解を図ることができ、客観的な評価につながった。評価基準をクリアしており、ほぼ目標達成と評価できる。</p>		
<p>【全学部】</p> <p>○修学旅行の在り方について見直す必要がある。</p>	<p>○普段の教育活動の延長上での生活経験を基本とした修学旅行を計画する。</p>	<p>&lt;活動計画&gt;</p> <p>①修学旅行の在り方について各学部で年間3回以上協議する。</p> <p>②修学旅行実施検討委員会を年間5回以上実施する。</p>	<p>&lt;活動計画の実施状況&gt;</p> <p>①7月、9月2回、1月に学部会で、修学旅行実施検討委員会が提案する今後の修学旅行の在り方(案)を協議した。平成27年度小中学部合同修学旅行は、移動時間の短縮が難しかったため、降車後の休憩を長くとり、見学地を1カ所にした計画を立てた。</p> <p>②修学旅行実施検討委員会(主事会含む)を年間10回実施した。より充実した思い出に残る修学旅行をめざし、今後の修学旅行の方針、実施方法について協議した。学部会で</p>	<p>総合評価</p>	<p>修学旅行は学校外に教育の場を求めて行なわれる活動であるので、学校内では得がたい学習を行なう機会として有効に活用するようその計画と実施は学校の創意と教育的識見を十分に生かしてほしい。また、子どもたちの健康面・安全面への配慮</p>	<p>次年度は小中学部合同修学旅行実施にむけて、全員が参加でき、より充実した思い出に残る修学旅行を保護者の理解・協力を得ながらすすめていく。</p>
				<p>&lt;評定&gt;</p> <p>B</p> <p>-----</p> <p>&lt;所見&gt;</p> <p>保護者からは現在の修学旅行の内容(行き先等)を継続してほしいという希望があるなかで、今後の修学旅行について検討した。教育活動として実りあり、思い出に残る修学旅行をめざすという方</p>		

		意見等を受けて改訂し、保護者説明会で説明した。 <評価指標の達成度> 教員アンケート結果で普通の教育活動の延長上での生活経験の拡大を基本とした修学旅行が計画できたという回答を 80%以上得る。	針を示し、理解・協力を得た。修学旅行は、児童生徒（保護者）にとって非常に関心の高い学校行事である。平成 27 年度の実施にあたっては、課題への対応について十分説明し、理解・協力を得られるよう努める。	が評価できる。	
--	--	--	---	---------	--

\* 「評定」の基準      A：十分達成できた      B：概ね達成できた      C：あまり達成できなかった      D：全く達成できなかった

重点目標 2 ICT（情報通信技術）の推進による外部の専門家を活用した授業改善						
自己評価				学校関係者評価	次年度への課題	
重点課題	重点目標	活動計画と評価指標	評価	学校関係者の意見	今後の改善方策	
<b>【支援・研究開発部、教育推進部】</b>  ○ ICT についての理解では、「まあまあできている」と答えた教員が多く、ある程度はわかっているつもりでも、十分に理解しているとは感じていない教員が多い。[アンケート結果より] ○ ICT 機器を授業で使っている教員は少ないが、「たまに使って	○ ICT や ICT 機器についての理解を深め、授業への積極的な活用を推進し、授業改善につなげる。	<活動計画> ① 外部専門家の知見を活用し、ICT 機器を活用した肢体不自由児に対するコミュニケーション支援の在り方についての研修会を持つ。  ② e-ラーニングを活用した研修を 2 回以上行い、ICT 機器やその活用法についての理解を深める。 ③ 授業への導入を進め、事例を紹介する機会を 2 回以上設け、教員間での情報交換を行う。	<活動計画の実施状況> ① 8 月 19 日に、香川大学教育学部教授坂井聡先生を講師に招き、午前に希望研修「障がいのある児童生徒のための ICT」、午後に全体研修「ICT 機器を活用した、肢体不自由のある児童生徒へのコミュニケーション支援」を実施した。 ② e-ラーニングを活用した研修「ICT って何??」を行った。 ③ 夏季休業中に、本校教員が講師となり希望研修「iPad の活用」を実施した。iPad で活用できるアプリの紹介を行った。12 月 26 日に、徳島県立鴨島支援学校より新居泰司先生を講師として招き、iPad のタッチパネルを指のかわりに外部スイッチで操作するためのユニットを製作する、希望研修会を実施した。製作と共にスイッチで iPad を操作する方法を紹介した。	総合評価  <評定>  <b>B</b>  ----- <所見> ICT についての理解は、アンケートの結果、評価指標の数字にはやや届かなかったが、理解は進んでいると思われる。さらに理解を深めるための取組を進めたい。 坂井聡先生の講演については、おおむね好評を得ることができた。e-ラーニングの活用については、準備不足もあり、1 回の実施にとどまった。e-ラーニングは、実施方法や内容を工夫することで、効果的な自己研修を行うことができると思われる。今後検討を進める価値があると思われる。	「ICT 機器を活用した、肢体不自由のある児童生徒へのコミュニケーション支援」の一つとして、児童生徒の意思表示の明確さの充実をめざした、OAK プログラムによる学校の取組に期待したい。 この方法によると、児童生徒の内面が外から見えるようになるので、評価として測定しやすくなる。10 年前に音楽を聞かせてビデオを撮って心拍等を測定して分析するという取組を実践したが、OAK プログラムによ	OAK プログラムによる学校の取組を進めるために外部の専門家として県内の 4 大学との連携を推進する。キネクトの制作、データの数値化、マトリックスの活用、ICT 機器の感度等について相談を進める。 教員のニーズのステップに対応して、ICT や ICT 機器についての理解を深め、授業への積極的な活用をさらに図るため、研修の機会を設ける。 e-ラーニングの効果的な活用方法を検討し、

<p>いる」と答えた教員が多く、積極的に活用しているという状況ではない。[アンケート結果より]</p>	<p>&lt;評価指標&gt; ①アンケートによる評価で、ICTについての理解が、「できている」「まあまあできている」を合わせて90%以上、「できている」を40%以上にする。 ②ICT機器を授業で、「よく使っている」「たまに使っている」を合わせて90%以上、「よく使っている」を40%以上にする。 ③ICTを活用することで授業改善を図ることができたという評価を60%以上得る。</p>	<p>&lt;評価指標の達成度&gt; ①教員アンケートで、ICTについての理解が、「できている」「まあまあできている」を合わせて87.8%であった。「できている」が38.8%であった。 ②教員アンケートで、ICT機器を授業で、「よく使っている」「たまに使っている」を合わせて95.9%、「よく使っている」が44.9%であった。 ③教員アンケートで、ICTを活用することで授業改善を図ることが「できた」が、87.8%であった。</p>	<p>教員を対象としたアンケートによると、94%近い教員が今後もICT機器を授業で使いたいと考えており、研修会に参加したいと考える教員は98%になる。ICT機器を積極的に取り入れる教員は増えると思われ、研修会等を通じて、ICT機器やその活用法についての情報を提供する必要がある。</p>	<p>学校の取組は、より簡単に分析できると感じた。これまで気付きにくかった児童生徒の小さな動きやその変化から能動的な活動の把握が可能になること等は、児童生徒のコミュニケーションの充実のつながる。</p> <p>データを積み上げていくことにより、明確になることがあると思われる。不随意運動をどのように抑制するのかという課題があるが、コンピュータが児童の何かの動きのパターンを把握して判断できることを期待したい。成果報告の方法によっては、先生方の仕事が膨大になるので、無理なくバランス良い計画が必要と思う。学校が進めている現在の取組を充実させて負担過多にならない方法で実践すると良いのではないかと考える。</p>	<p>ICTやICT機器についての理解や情報交換の手段として活用を進める。</p>
---	--	---	---	--	---

\* 「評定」の基準      A：十分達成できた      B：概ね達成できた      C：あまり達成できなかった      D：全く達成できなかった

重点目標3 ISO（新学校版環境ISO）の推進を通じたESD（持続可能な開発のための教育）への取組						
自己評価				学校関係者評価	次年度への課題	
重点課題	重点目標	活動計画と評価指標	評価	学校関係者の意見	今後の改善方策	
【学校生活部】 ○新学校版環境ISOの活動を推進する必要がある。	①新学校版環境ISOの活動の推進と見直しを実施する。  ②保護者と連携した活動を充実させる。	<p>&lt;活動計画&gt;</p> <p>①-1 新学校版環境ISO推進委員会を実施し、計画や活動内容について確認・協議する。</p> <p>①-2 管理職による内部評価を実施する。</p> <p>②-1 ペットボトルのキャップ集めのリサイクル運動を、保護者と連携して実施する。</p> <p>②-2 学校周辺のゴミ拾いの活動を、児童生徒・保護者・教職員が協力して実施する。</p> <p>&lt;評価指標&gt;</p> <p>①-1 新学校版環境ISO推進委員会を学期に1回実施し、計画や活動内容について確認・協議する。</p> <p>①-2 管理職による内部評価を年2回（9月・2月）実施する。</p> <p>②-1 ペットボトルのキャップ集めのリサイクル運動で、毎月3Kg以上を回収する。</p> <p>②-2 学校周辺のゴミ拾いの活動を各学部で年1回以上、児童生徒・保護者・教職員が協力して実施する。</p>	<p>&lt;活動計画の実施状況&gt;</p> <p>①-1 新学校版環境ISO推進委員会を実施し、計画や活動内容について確認・協議している。</p> <p>①-2 管理職による内部評価を実施している。</p> <p>②-1 ペットボトルのキャップ集めのリサイクル運動を、保護者と連携して実施している。毎月計量して関係機関に持参している。</p> <p>②-2 学校周辺のゴミ拾いの活動を、児童生徒・保護者・教職員が協力して実施している。</p> <p>&lt;評価指標の達成度&gt;</p> <p>①-1 新学校版環境ISO推進委員会を1学期に1回、2学期に2回実施し、計画や活動内容について確認・協議した。</p> <p>①-2 管理職による内部評価を9月・12月に実施した。（いずれも18点満点の評価を得ている。）2月にも実施予定である。</p> <p>②-1 ペットボトルのキャップ集めのリサイクル運動で、毎月3Kg以上（4月から1月までに63Kg）を回収できている。</p> <p>②-2 学校周辺のゴミ拾いの活動を各学部で1・2学期に1回～2回、児童生徒・保護者・教職員が協力して実施している。</p>	<p>総合評価</p> <p>&lt;評定&gt;</p> <p style="text-align: center;">A</p> <p>&lt;所見&gt;</p> <p>ISOの活動に取り組んで今年度で6年目である。その間、県教委の認証を2回受け、活動内容も少しずつ変化している。日々の環境チェックやリサイクル運動等により、環境問題に対する意識は少しずつであるが高まっていると思われる。</p> <p>ささやかな取組が多いが、児童生徒・保護者・教職員の連携を重視した活動を今後も続けていきたいと考えている。</p>	<p>日本の教育システムは重症児の教育システムを含めて外国にはないため、理解される分には時間がかかるだろう。ISOを環境教育の視点から始め、地域や社会とのかかわりに変え、さらに発展して、ユネスコスクールの指定という状況が理解できた。道徳観も含めて、自分たちの主体性や達成感、自己充実感につながる取組に期待している。</p>	<p>新ISOの活動で、児童生徒・保護者が参加できる機会を増やす。また、ESDという「持続可能な」取組を通して、地域社会とつながりを図る。そして、児童生徒の道徳性、自尊感情、自分たちの喜びや生き甲斐等の心理面の充実が図れるよう、ISO委員会組織を充実させる。</p>



<p>【高等部】 ○地域社会と連携した環境学習活動を推進する必要がある。</p>	<p>○生徒が主体的に地域社会のリサイクル活動に取り組む。</p>	<p>&lt;活動計画&gt; ・生徒が呼びかけて資源ゴミを収集し、処理をして近隣の資源ゴミ回収施設に持って行く。</p> <p>&lt;評価指標&gt; ・資源ゴミの回収活動を年間5回以上実施する。</p>	<p>&lt;活動計画の実施状況&gt; ・学校の中で出るペットボトルや保護者にチラシを渡して持ってきてもらった牛乳パック等を、作業学習で処理をして近隣のスーパーマーケットの回収場所に持っていった。</p> <p>&lt;評価指標の達成度&gt; ・回収活動は年間で10回実施した。</p>	<p>総合評価</p> <p>&lt;評定&gt; <b>B</b></p> <p>-----</p> <p>&lt;所見&gt; I・II類型の生徒がエコ活動に関心を持って熱心に取り組んだ。作業活動や回収活動を通して学校や地域、そして地球の環境を守ることに繋がることが考える機会になった。また、社会の一員としての役割を果たす社会参加の機会になった。III類型の生徒の活動の機会が少なかった。</p>	<p>現在、地球環境の悪化が深刻化し、環境問題への対応が人類の生存と繁栄にとって緊急かつ重要な課題となっている。豊かな自然環境を守り、子孫に引き継いでいくためには、エネルギーの効率的な利用など環境への負荷が少なく持続可能な社会を構築することが大切である。その意味でも、地域と連携しながら環境問題について学習し、自主的・積極的に取り組んでいく環境保全活動は高い評価に値する。環境教育は極めて重要な意義を有している。</p>	<p>III類型の生徒の学習としても取り入れる機会を増やし、学部全体で取り組んでいくようにする。また、より多くの人に呼びかける機会を作り、地域との関わりを広げられるようにする。</p>
--	-----------------------------------	--	---	--	--	--

\* 「評定」の基準      A：十分達成できた      B：概ね達成できた      C：あまり達成できなかった      D：全く達成できなかった